

## 「キラリ！三瓶☆夏☆キャンプ」

### 1 趣 旨

国立三瓶青少年交流の家を拠点として、三瓶とその周辺地域の自然、歴史に触れ、興味・関心を深めるとともに、参加児童が自然保護意識を高めることを目指す。また、この体験を通して参加児童に、自ら困難に挑戦し、やり遂げようとする力を養うとともに、家族と離れ、同年齢の仲間と集団生活をする中で、仲間の大切さや規範意識、集団との関わり方について気づかせる。

### 2 事業の概要

(1) 期 日：令和2年8月11日（火）～15日（土）【4泊5日】

(2) 参加者：小学生13名（5年生10名、6年生3名）

法人ボランティア2名、島根県教職員初任者研修者1名

(3) 主な日程

令和2年8月10日（月）

前日準備（道具点検・準備）

打合せ（日程確認・活動内容の確認、緊急時の対応の確認、三瓶山登山道の安全確認 等）

	8月11日（火）	8月12日（水）	8月13日（木）
6:00		起床	起床
7:00		朝食（野外炊飯）	朝食（野外炊飯）
8:00			
9:00		バス移動	3 <sup>rd</sup> charm ～三瓶の魅力を満喫しよう～ チームでチャレンジ！ ・サイクリング ・オリエンテーリング ・自然散策 ・バウムクーヘンづくり 等
10:00	受付・開会式	2 <sup>nd</sup> charm ～大田の魅力を発見しよう！～ ・大森の街並ウォークラリー 昼食（弁当） ・琴浜の鳴り砂体験・海水浴	
11:00	アイスブレイク		
12:00	昼食（バイキング）	バス移動	昼食（弁当）
13:00	1 <sup>st</sup> charm ～生活の拠点を作ろう～ ・テント設営（営火場） ・活動目標決め	夕食（野外炊飯）	夕食（野外炊飯）
14:00	夕食（野外炊飯）		
15:00		入浴（交流の家）	入浴（交流の家）
16:00	入浴	ふりかえり	ふりかえり
17:00	計画確認	就寝	就寝
18:00	ふりかえり		
19:00	就寝		
20:00			
21:00			

	8月14日（金）	8月15日（土）
6:00	起床	起床
7:00	朝食（野外炊飯）	朝食（野外炊飯）
8:00		テント撤収
9:00	4 <sup>th</sup> charm ～仲間と力を合わせ三瓶山を縦走しよう～ ・三瓶山登山 女夫松登山口～男三瓶～交流の家	道具の片づけ
10:00		ふりかえり
11:00		
12:00	昼食（弁当）	昼食（バイキング）
13:00		～旅を終えて～ スライドショー上映
14:00		閉会式・解散
15:00		
16:00		
17:00	夕食（野外炊飯）	
18:00		
19:00	入浴（交流の家）	
20:00	ふりかえり	
21:00	就寝	

### 3 事業の内容

#### ○プログラムデザインと企画のポイント

- ・昨年度までの移動型キャンプから国立三瓶青少年交流の家を生活の拠点とする拠点型キャンプに変更した。変更により時間に余裕が生まれ、幅広い活動に柔軟に対応・実施することができた。
- ・琴ヶ浜の鳴り砂や石見銀山のウォークラリーにチャレンジする機会を設け、体験を通して大田市の魅力を深く感じることができるようにした。
- ・交流の家を拠点とすることで、当所の活動プログラムを活かした体験活動の機会を提供した。
- ・三瓶山登山では、孫三瓶山から子三瓶山を経由し、男三瓶山の頂上をめざした。これまで一緒に活動してきたグループと力を合わせて登山することで、グループの絆を深められるようにした。
- ・自分の食器、寝袋、Tシャツを参加費で購入し、自分の物は自分で責任をもって管理させ、朝食のソロ炊飯とカートドックは一人で作るというように自分の力を伸ばす場面を意図的に設定することで、回数を重ねるにつれて上手になっていき、自信を高めることができた。
- ・各活動や夕食の炊飯活動では、チームで協力して活動することとし、夜のふりかえりを大切にすることで、チーム力が向上した。

### 4 成果と課題

※本事業では、青年ボランティアを「学生スタッフ」と呼んでいる。

項目	回答	満足	やや満足	やや不満	不満
4泊5日のキャンプはどうでしたか		85%(11人)	15%(2人)	0	0
プログラム内容はどうでしたか		85%(11人)	15%(2人)	0	0
時間的にはどうでしたか		54%(7人)	23%(3人)	15%(2人)	8%(1人)
職員の関わりはどうでしたか		69%(9人)	23%(3人)	8%(1人)	0
学生スタッフの関わりはどうでしたか		85%(11人)	0	15%(2人)	0

#### ○小学生アンケートの記述：実施後のアンケートより

- ・初めての野外炊飯では、最初は遅かったけどだんだん早くなって、早く食べられるようになりました。登山では、協力して話し合っただけで良かったので良かったです。また次も来たいです。とても楽しかったです。
- ・いろんなプログラムがあって、みんなで協力してできました。友だちもいっぱいできたし、みんなでする活動が多くて良かったです。このようなイベントにもっと参加したいと思いました。
- ・はじめは一人で寝るのが怖かったけど、慣れて寝ることができて良かったです。友だちも話しかけてくれて多くなった。来てよかったと思った。

#### ○小学生アンケートの記述：実施1カ月後のアンケートより

- ・石見銀山の周りの歴史に触れることができ、これから石見銀山のことを調べたいと思いました。知らない人と5日間過ごして、すぐに仲良くなれたのでうれしかったです。協力したり支え合ったりしたから、三瓶山を登ることができたと思います。交流の家のプログラムでバウムクーヘンを作ったり、ボルダリングをしたりするのが楽しかったです。
- ・あまりしたことの無いようなことに、チャレンジを多くするようになった。友だちとすぐに仲良くなれるようになった。
- ・登山では、山頂でみんなが笑顔になっていた。みんなが笑顔だとこんなに楽しいんだと思ったので、これからは、できるだけ前向きで、笑顔で生活していきたいと思った。
- ・進んで行動したり、計画を立てて生活したりすることができるようになった。

#### ○保護者アンケートの記述：実施1カ月後のアンケートより

- ・キャンプ以前と大きく違うのは、家族に、特に妹や弟に優しくなったように感じます。今までは疲れたり、気に入らないことがあったりすると感情を爆発させることが多かったのですが、自分でできることが増え、自分の中で解決できることもあるようで、落ち着いて話せる機会が増えました。家族の一員としての自分の役割を意識して、今は家族で協力しあうことに喜びを感じて楽しく過ごせています。

- ・少しずつですが、自分から進んで家の手伝いをしたり、先のことを考えて行動したりするようになりました。
- ・キャンプが楽しかったようで、キャンプでの出来事をとてもうれしそうに話してくれました。反抗期なのか、家族の会話が減りつつあると感じていたので、沢山話をしてくれてとてもよかったです。
- ・食事を作ることの大変さと楽しさを学んだようで、家でも積極的に手伝ってくれるようになりました。いろんな学校の子とお友達になれたこともとても喜んでいました。同じ班だったお友だちと文通が続いています。
- ・お皿洗いを手伝ってくれたり、一人部屋で早寝早起きできたり、班長の言うことを聞けたり、山も最後まで泣かずに登れたり、だいぶ成長して帰ってきてくれました。寂しいと思うくらい成長しました。勇気を出して行かせて良かったです。子供だけで駅から電車に乗ったのも大進歩でしたし、荷物の準備を自分でしたのもよかったです。(出る直前にバッグを変えて、忘れ物だらけになった失敗も成長のチャンスになりました。)
- ・三瓶山を登り切ったことをよく話してくれる。やり遂げた自信がついている。「やればできる」を実感できたように思う。

#### 《成 果》

- ・国立三瓶青少年交流の家を拠点とし、日程を4泊5日にすることで、時間や人員配置に余裕が生まれた。また、新型コロナウイルス感染症予防のため、募集人数を例年の半分の12名に縮小にするとともに、テント泊の予定を一人一室の宿泊室泊に変更した。他にも手指消毒の励行や小まめな健康観察をしたりするなど柔軟な対応ができ、コロナ禍においても安全にキャンプを実施することができた。
- ・事業終了後の参加者アンケートには、「もう少し長くてもよかった。」という感想がいくつかあった。一緒に活動し、寝食を共にした仲間との絆が深まり、良い思い出ができたことによるものと考える。
- ・拠点型キャンプにすることで、参加児童・スタッフ共に体力的な余裕が生まれ、それぞれの活動に集中・熱中することができた。炊飯活動では、作り方が似ているメニュー(カレー・シチュー・ハヤシライス)を採用することで、日程が進むにつれて、参加児童が上手に作るようになったことを実感することができた。
- ・毎日の振り返りでは、「ビーイング」の手法を用い、班の目標を共有することができた。また、自分が頑張ったこと、友だちの良かったところを確認することで、自分の成長を実感し自信を深めていくことができた。

#### 《課 題》

- ・今後も新型コロナウイルス感染症の影響がある場合、日程や募集人数、活動内容等について検討する必要がある。
- ・炊飯時の衛生面に関する配慮事項やテント泊の定員など、安全面について丁寧に検討し、スタッフ間で十分に共有しておく必要がある。
- ・長期キャンプを実施する上では、気象、活動場所、参加児童の体調等、常にリスクを意識し、危機管理を徹底しなければならない。今後も天候の変化や緊急時の対応について、適切に対処できるように、職員、青年ボランティアの意識の向上と、関係機関等との連携をより一層図っていく必要がある。



食事風景



三瓶山登頂記念



「ビーイング」によるふりかえり

(担当：企画指導専門職兼事業推進係長 宅間 邦晴)